子どもの生きがい
―カヨの記録から―

西村良子

子どもの生きがいについて書くようにと、編集の方からうかがった時、ふととまどいました。子どもに〝生きがい〟などという重い言葉が一体どうあてはまるのだろうかと。ふつう、生きがいという言葉は、生きていることの価値を意識して感じる実存感や価値観をさしていて、一度否定された生に対するアンチテーゼでもあるわけです。だから、生きがいを感じることのできるのは、母胎から引きついだ自らの生命を、自らの手でしっかりと引き受けることのできる時、つまり少なくとも青年期を通りぬけたあとに得られるものと思っていたのです。

でも、子どもたちの目の輝き、躍動するような生の充実感、そんなものを思い浮かべると、それを〝生きがい〟と呼んでみてもいいように思われます。私がここでそのような〝生の充実感〟を子どもの中に探ってみようと思いました。

ところで、子どもの生きがいについて、体験から書くようにとのことでしたので、過去にめぐりあったさまざまな臨床例を思い起こしてみました。でもほととうの日常の中に体験する子どもの世界というと、やはり自分の子どもがいちばん身近ですので、いささか気恥ずかしいのですが、下の娘、カヨについて書いてみようと思います。

カヨはごく小さい時から、内面を明確に表現してみせてくれる子どもでした。次女として生まれ形成された生き方なのか、それともっと以前からもって生まれた彼女特有の財産なのか、彼女は強烈に自我をつきつけてくる子どもです。だから彼女の内的な体験は比較的わかりやすいので、彼女と生活していて、私はずいぶんいろんなことを学ばせてもらいました。

子どもの内的体験に共感するのは、実際たいへんむずかしいと思います。私は以前プレイセラピーの場で、セラピストとして子どもと遊んでいて、しばしば、子どもの中に生じてくるよろこびの表現が、共にいる私の中に起こってくるよろこびの感情とずれているのを感じました。当然のことでしょうけど、子どもと行動を共にしながらも、私の方はどうしても行動の外わくにとらわれがちで、外からみての進歩やまとまりに反応してしまうのですが、成長を経験しつつある子どものよろこびは、真実、自己の内的体験の中で納得されるものでなければならないようです。外からみての、「ああよかった」「あ！できた」ではなく、自分に納得できた「ああできた」「ほんとによかった」で

なければならないのです。

生きがいという言葉にあてはまるような生の充実感を伴うよろこびは、まさにこのような内的体験においてのみ意味があるものだと思われます。

さて、カヨの生活は、いろいろな遊びに明け暮れているわけですが、その遊びをじっと見ていますと、彼女は外界と自己の世界とを関係し合わすことに懸命のようでした。外側はうすぼんやりとしてはてしなく広がった中で、自分を中心に照らし出されたごく小さな世界のいろんな事象をいじくりまわし、つなぎあわし、切りはなす、そういう行為の連続が、次第々々にいろんなものを明るみの中にさそい出していく。その営みの中で、彼女はしばしば目を輝かせて何かのとりこになったりはしゃいだりしていました。その行為は私からみるとごく単純で、個々の行動はさほど感慨を呼びさますほどではないのですが、続けてみてみると〝なるほど〟と思うのです。

たとえば、二歳半ごろのことですが、朝十時半になるとNHKの「おかあさんといっしょ」が始まります。彼女は十時のニュースが始まると私を呼びに来て、一緒に見ようと毎日のように誘うのです。そして説明をしてくれます。「お兄さんがね、ヤア！って出てくるよ」「ほらね」「この次はおうたのお姉さんよ」「ほらね」という具合で、その「ほらね」のところですばらしく目を輝やかすのです。そしてその「ほらね」は次第にくわしく、アニメーションの画像の変化や、登場人物のくせに至りました。

その「ほらね」に気づいてから、カヨの遊びを見ていると、彼女はそのころ事柄の予測ということになみなみならぬ関心をもっていることがわかりました。積木をどのくらい積んだら倒れるとか、どのくらいの高さからならとんでも大丈夫とか、小さな一つ一つが自分の思い通りに運ぶと目を輝かせて喜んでいるのです。

事態を先どりできるということは、幼い子どもにとってたしかに重大なことにちがいありません。自分の外にある世界の動きが、たとえ一部分にせよ手のうちに入ったようなもので、自分の力で征服したその手ごたえをずしりと感じているのだと思います。

もちろん外界の事象ばかりでなく、自分自身の力が成長しているという実感も、子どもにとってはたのもしいよろこびです。背がのびて、調理台の上が見えるようになったとか、とてもほしかった姉のおさがりの洋服が着られるようになったとか、ましてや、今までどうしても力の足りなかったことができるようになったとかいうことはなおさらです。

カヨが印象的に経験したことの一つは、ある変わったスベリ

台ですが、いつも買物途上の遊園に、登り口がはしごではなく、七〇度ほどの傾斜をもったのっぺりした板に、手すりと足をふみこむ小さな穴がポツポツとついているだけのがありました。ほとんどいつも通るとそこへ行き排戦するのですが、登れなくてあきらめていました。がある時、一緒にいた姉がこともなげにそれを登ったのを見たカヨは、真剣な表情で発奮し、とうとう登りきったのです。スベリ台の頂上に立った彼女は両手をあげて「ワーイ　ワーイ　ママ見て、ここよ」とほほを紅潮させ、目を輝かせて叫びました。

自己拡大感を味わいたい気持は、時には同一視や、役割演技の中に生き生きと表現されます。

二歳前でしたが、カヨは毎晩お風呂からあがってパジャマを着ると、急いで寝室へ行き、自分のふとんに並べて敷かれている私のふとんに入って眠ったふりをしています。あとからあがった私が「あらここに寝ている人は誰かしら」といいますと、きまって「ママでちゅよ」とすましていい、私の顔を見てニコニコするのです。私のふとんを先に占領したとか、甘えて入っているとかよりも、私はその笑顔から、彼女が私になりかわりたがっている気持を強く受け「まあ、ママはずい分早かったのね」といったものでした。このころには、抱けるお人形を赤ちゃんにして、自分が母親になる姿をしばしば見ました。赤ちゃんを寝かせる時にいうせりふや、おしっこをさせる姿勢などに私は自分の姿を見て、始終ドギマギしたことでした。

ところで、私が、最も印象強くカヨの心の葛藤を感じたのは、二歳を過ぎて間もなくでした。そろそろおむつがとれそうだというので、おまるをさかんに用いていたころです。

ある日突然彼女はおまるの前に立ちはだかって、立っておしっこをするというのです。姉の時にも経験しましたので、私は「カヨちゃんは女の子でしょう。女の子はおチンチンが中の方にあるから、おすわりしてしたほうがじょうずにできるわね」といってみたのですが、彼女は毅然として立ったままでする主張し、とうとうその姿勢ですませてしまったのです。それから何回かそんなことがあり、もちろんじょうずにできるわけではなく、いつもそそうをしてしまいました。

それから半年もたったある晩、彼女が寝言をいっているのを聞きつけて、そばへ行ってみましたら、彼女はなんと「オチンチンがない！」と叫んでいるのです。私はドキリとしました。男根羨望という言葉は精神分析の常識だし、ボーボワールは第二の性でその体験を述べています。しかし目の前の三歳にならない子どもの口から無意識とはいえ、はっきりとその言葉を聞いて私はたじろぎました。そして眠っているカヨの頭をなでながら、「そうね、カヨにはオチンチンがないわね。そうね。ほん

とにそうね」とオロオロしていました。

三歳少し前から、彼女は外へ友だちを求めて行きたがりました。が彼女は男の子にひどく偏見をもってこわがり、またしばしば男の子にいじめられて泣きました。そんな状態がしばらく続いたので、これには私も親として何とかしなければならないと心を痛めていたのですが、三歳をすぎて少ししたころ、彼女ははればれとした顔で「カヨちゃんはね、女の子でしょ、だから大きくなったらパパと結婚ちゅるの」と宣言しました。

それからの彼女はさかんに「女の子だから」といっておしゃれに気を使い、「早く大きくなってパパと結婚しなくちゃならないから」ご飯もたくさん食べるし、私の料理の手伝いをしたいし、お勉強もしなくちゃならないというのです。あまり真剣なので、しばらくはいいそびれていたのですが、ある時私が「カヨちゃん、パパはね、ママと結婚したでしょ。だからカヨちゃんは誰か他の人と結婚した方がいいとママは思うのだけど」といってみました。そしたらカヨの顔はみるみる曇って大粒の涙を流し、次いでワァワァと泣くのです。びっくりした私は、「そう、カヨちゃんはそんなにパパと結婚したいの、そうだったの。ママ、わるいこといってしまってゴメンね」とあやまったものでした。彼女はありとあらゆるものを女のもの男のものに分け、色も男色、女色ときめ、私がスラックスをはくと「ママは女だのにどうしてズボンはくの」と批難し、自分は頑としてスカートだけをはきました。女はこうと作りあげた自分のイメージとちがう女の人がテレビに出てくると「アハハ　あの人女だのにおかしいわあ、アハハ　アハハ」と笑いました。

今、四歳をすぎて、彼女は聞かれると「大きくなったらパパよりもっとかわいくて、もっとやさしい人と結婚する」といい、時に好んで年長の男の子の中にまじって喜々と遊んでいます。

彼女の男根羨望の葛藤もどうやら無事落ちついて私はほっとしているところですが、このことを経験してから、私は子どもの心に生起する問題の大きさと、それに真すぐに、的確にしかも真剣に立ちむかっていく子どもの心の力に驚いています。

外から見ていてとるに足りないような小さな喜びも、また驚くような葛藤も、共に子どもの心の中では連続したそれぞれの文脈の上に意味をもち、それを正直に感じ、生きぬいていく中に子どもの心の成長があり、その成長を実感をもって感じる充実感が子どもの生きがいであるといえるのではないかと思います。

カヨは今あらたに、人間がどうしてできるのか、死ぬとはどんなことなのかといういわば〝死と再生〟の問題にとりかかっているようです。(身近に祖父母の死を見ましたので……カヨにしては少し早かったように思いますが) 生きがいなどといっていられないほど忙しいといっているような気もして来ます。

—四七・六・三〇—